



Silk Country
Gunma 21

絹遺産紀行

ぎぬいさんきこう

はじめに

プロローグ

群馬と世界をつなぐ絹遺産―富岡製糸場と絹産業遺産群―

第1章 西毛紀行

- 一・〈甘楽〉旧甘楽社小幡組倉庫
- 二・〈安中〉碓氷峠鉄道施設
- 三・〈藤岡〉高山社発祥の地
- 四・〈下仁田・富岡〉旧上野鉄道関連施設
- 五・〈下仁田〉荒船風穴
- 六・〈富岡〉旧官営富岡製糸場
- 七・〈上野〉旧黒沢家住宅
- 八・〈安中〉旧碓氷社本社事務所
- 九・〈南牧〉仲庭集落
- 十・〈藤岡〉高山長五郎家分家

第2章 北毛紀行

- 一・〈中之条〉 栃窪風穴
- 二・〈沼田〉 薄根の大クワ
- 三・〈中之条〉 富沢家住宅
- 四・〈六合村〉 赤岩地区養蚕農家群

第3章 中東毛紀行

- 一・〈高崎〉 旧官営新町屑糸紡績所
- 二・〈桐生〉 桐生・本町一、二丁目
- 三・〈伊勢崎〉 島村地区養蚕農家群
- 四・〈前橋〉 前橋市蚕糸記念館
- 五・〈桐生〉 桐生倶楽部会館
- 六・〈伊勢崎〉 小茂田家住宅
- 七・〈前橋〉 旧安田銀行担保倉庫

〈発刊の辞〉

ブックデザイン 寺澤徹（寺澤事務所）

190 182 174 166 158 150 142

132 124 116 108

群馬と世界をつなぐ絹遺産 — 富岡製糸場と絹産業遺産群 —

富岡製糸場の出現は、日本における産業革命のシンボルだった。生糸の輸出が飛躍的に増えるにつれ、良質の繭が大量に必要とされた。江戸期からの養蚕・製糸業の大きな伝統を持つ群馬には、特徴的な養蚕農家が連なる農村風景が至るところに現れた。養蚕農家に蚕の原卵を提供する蚕種製造農家、蚕種を保存する風穴、養蚕農家を指導する教育機関、伝統的な在来座繰製糸農家の組合、繭や生糸の輸送施設、絹織物業など絹産業にかかわるすべてのサイクルが一つのエリアに形作られていく。この歴史を今に伝える「富岡製糸場と絹産業遺産群」が二〇〇七年、世界遺産国内暫定リスト入りを果たした。まずは、同遺産群を構成する十カ所を巡ってみよう。

世界遺産国内暫定リスト入りした「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産

高山社発祥の地【藤岡市】
赤岩地区養蚕農家群【六合村】
旧官営富岡製糸場【富岡市】
荒船風穴【下仁田町】
栃窪風穴【中之条町】

富沢家住宅【中之条町】
薄根の大クワ【沼田市】
旧甘楽社小幡組倉庫【甘楽町】
碓氷峠鉄道施設【安中市】
旧上野鉄道関連施設【下仁田町】

不撓不屈の養蚕研究が、突き抜けた技術を生み出した。

高山社発祥の地【藤岡市】

生糸の輸出にとって品質向上が至上命題だった幕末から明治期。さまざまな養蚕方法の研究が行われたが、中でも多くの養蚕農家の支持を集めたのが、養蚕指導家・高山長五郎が考案した清温育だ。その拠点となったのが、長五郎の生家でもあった高山社。清温育の完成に28年もの年月をかけた長五郎と弟子たちの苦闘の舞台だった。門下生たちは巡回指導員として全国各地の養蚕農家へ清温育を伝え、その活動はやがて全国一の養蚕指導組織、高山社に精実していくことになる。高山社発祥の地には、明治初期に長五郎が清温育を発案した蚕室、母屋、付属施設と江戸期の長屋門などが現存している。[本文42ページ]



激しい空襲を物語る黒く焦げたれんが

へシルク探訪

今も「ランドマーク」

旧

安田銀行担保倉庫から南へ約

二〇〇呎の国道17号沿いに「日本最初の機械製糸場」の碑が立つ。一八七〇年に設立された前橋藩営製糸所跡だ。前橋の市街は広瀬川を境に、北と南では趣が大きく異なっていた。北は製糸工場やれんが倉庫などが立ち並ぶ工業地帯、南は着物などが売られる商業地域だった。

広瀬川ほとりには前橋を代表する製糸工場、交水社が稼働。水は、繭を洗うためや工場での機械の動力として、利用された。豊富な地下水にも恵まれた北側一帯は、一大工業地帯だった。細ヶ沢町（現

住吉町）、立川町（現千代田町）、才川町（現若宮町）など水に関連する町名がいくつもあった。

一方、「街に行くてくる」といえば、広瀬川の南に行くことを意味した。原田恒弘さん（70）住吉町Ⅱは「街に行くことは、一種のステータスでもあった」と笑顔で振り返る。

戦後まで近隣に養蚕農家も多く、街を歩くと聞こえてくるカラカラという座繰り器で糸を引く乾いた音、さなぎのにおいは、前橋の風物詩でもあった。

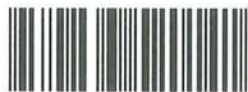
かつてのれんが倉庫や製糸工場跡は、広い敷地を持っていたことから商業施設などに変わった。今も街の「ランドマーク」となっていることが多い。

七〇年から九六年ころまで繭糸業を営んでいた同市朝日町の青木利吉さん（81）は「繭糸業者がたくさん集まって、相場の話をしたもんだ」と思い出を語る。仲間とお茶を飲んだり将棋をさしたりと憩いの場になった。

七〇年代に入り、海外産の繭に押され製糸業が衰退すると倉庫を利用する人も徐々に減った。乾繭取引所は七七年に同市古市町に移転、九八年に解散した。二〇〇一年に繭保管を打ち切り、最後は繭二十袋になっていた。いま倉庫内にはみこしや骨董品、電化製品などが保管されている。

倉庫から百ほどに住む原田恒弘さん（70）は前橋空襲直後の倉庫跡の光景が目に焼きついている。焼け落ちた倉庫跡に、百人近くの近隣住民が鍋を片手に集まっていた。軍需品として保存された塩が熱で溶け、硬いガラスの塊のようになっていた。当時貴重だった塩を大勢がき集めた。そこに原田さんも加わった。

「後でなめてみたけど苦かった。本当に塩だったかわからないな」と原田さん。倉庫には消火栓があったため、北側倉庫とその周辺の一部住宅は焼け残った。激しい炎の中、焼け落ちなかった倉庫は、住民の精神的な支えでもあった。「空襲を生き抜いたシンボリックな存在。おれたちも頑張らないとな」という気持ちになったよ」と



9784863520141



1920360012002

ISBN978-4-86352-014-

C0360 ¥1200E

定価 1,260円

(本体1,200円+税)

